

「シャクガの魅力(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

チョウ(蝶)とガ(蛾)には明確な区別はない。図鑑を見ると、ガのほうに圧倒的に種類が多く、少々乱暴な言い方をすれば、「チョウはガの一種」と言えるように思う。九州大学の昆虫学者だった白水 隆博士は、蝶と蛾の見分けについてこんな記述をしている。

・・・蝶と蛾をどういう点で区別したらいいかと言うと、我が国における限りでは、両者の区別は触角の形によるのが無難である。すなわち、チョウは先のふくれた「こん棒状」の触角を持っているが、ガのほうは「糸状・くし状・羽毛状」をしたものも多く、中にはスズメガやスカシバ類のように太いものもあるが、こん棒状ではない。しかし、世界のチョウ・ガに眼を向けると、ガのなかまにもこん棒状の触角を持ったものもいるし、ちょっと見ただけではチョウかガか区別しにくいようなチョウもいる。・・・



浅間高原にもアゲハ、キチョウ、ジャノメなどチョウは結構いる。写真は「ウラジャノメ」(北軽井沢)というチョウで、山荘の周りにもよく飛んでいる。写っているのは翅の裏側で、裏にも「眼状紋」が多数あるので、この名がある。遠目にはガに見えるが、触覚

の先端は「こん棒状」で、確かに蝶とわかる。地味な色のチョウだが、とても美しいと思う。

しかし、高原にもガのほうに圧倒的に多い。その中でも「シャクガ」仲間は何ものすごくたくさんいる。シャクガの幼虫時代はいわゆる「尺取虫」である。尺取虫がガになったのでシャクガ(尺蛾)というのだ。多くの人と同じで私もガは苦手だが、シャクガの仲間は小型のものが多く、中にはチョウよりもずっと美しいと思えるものもいる。私はシャクガの仲間だけは「少しは」好きで、よく写真を撮って観察している。



写真は「ヒョウモンエダシャク」(豹紋枝尺)というシャクガの一種だ。一見チョウなのだが、触覚は「櫛型」で確かにガの一種である。これも幼虫は尺取虫のはずだが、幼虫は見たことがない。



こちらは「ヒメツバメエダシャク」(姫燕枝尺)というやや珍しいシャクガ。絹のように透明な質感の翅で、気品さえ感じられる。浅間高原のシャクガの中では一番美しいと思う。夜間灯火に誘われて翅を開いて壁にとまる。このような展翅状態の姿勢を「静止姿勢」というが、一旦静止姿勢になると、朝までこのままのこともある。